西洋音楽の師　メーソン（その2）

音楽伝習生（伝習人）への指導

【メーソン愛用のピアノ】

日本人への音楽伝習は、当初ピアノ伴奏による唱歌指導が中心であった。メーソンも自分のピアノをアメリカから取り寄せ、演奏会で自ら伴奏をした。（資料６）

また、伊澤やメーソンの胸の内には、管楽器や弦楽器によるオーケストラ演奏も、構想としてあった。

音楽取調掛が設置されると、伶人（太政官に設けられた雅楽局・式部寮の楽人）や伝習生に西洋音楽の技法を学ばせようと、洋琴（ピアノ）・洋弦（バイオリンなどの弦楽器）を取り入れることになった。いざ伝習を始めると、伶人たちの楽器習得技能や演奏レベルは伊澤やメーソンの想像をはるかに超えていた。そのため、明治 15 年の演奏会では、すでに洋風管弦楽として伝習人による演奏がなされるほどであった。（資料３）

資料９「音楽取調掛ノ音楽伝習生募集原案」

その後も、幅広く伝習生を募り、16 歳から 25 歳の男女２２名を採用している。

その募集原案には、（資料９）

「音楽師タル免状ヲ附興スベシ」

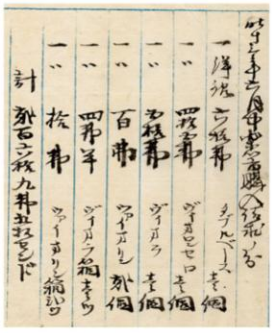
「俗曲又ハ雅楽等ニ習熟スル者ナレバ最モ善シトス」等の考えが記されており、伊澤の器楽演奏にかける期待が読み取れる。

洋楽器の購入

伝習が始まると、必要な洋楽器が輸入された。（資料 10）音楽取調所が必要な洋楽器を注文したが、それとは別に、メーソンは伶人用に独断で楽器を注文している。後に、その代金が不足分となって文部省に請求される等の問題も起きた。しかし、そこにメーソンの伶人や伝習生たちへよせる思いや、日本の雅楽演奏家たちによるオーケストラ演奏への期待を感じることができる。

当時のバイオリンの価格は、今ではどのくらい？

「バイオリン２個 100 ドル」と資料の価格表に記されています。当時の為替相場は、1 ドル＝約 1 円です。明治 16 年に政府が決めた収入の基準では、「一家４～５人で年収 120 円が中等」だそうですから、2 挺のバイオリンは、一家の年収並みの価値があったと考えられます。



資料 10「洋楽器の価格表」

メーソンの帰国

資料１１「上申書」

メーソンは、「唱歌集の編集」「音楽伝習生や雅楽局伶人への西洋音楽伝習」「師範学校附属小学校生徒への音楽指導」「伝習の成果を披露する音楽会の開催」など、日本の西洋音楽の導入にあたり、めざましい成果をあげている。

明治15 年1月、2カ年の契約が切れるとき、まだ事業の途上にあるとして、伊澤はメーソンの傭継と給料の増額（月額 250 円を 300 円へ）を求める上申書を提出している。（資料 11）

しかし、その年の夏、メーソンにしばしの帰国が認められている間に、ドイツのエッケルトがメーソンの後任として採用される。

メーソンはその後、伊澤への書簡の中で再度の来日を強く希望し、伊澤もメーソンの継続任用を望んだが、その願いはついに叶えられることはなかった。

＊ 資料は「伊澤資料」として上伊那教育会所蔵、「創造館」に保管されている。　上伊那教育会郷土研究部伊澤修二委員会作製　2012年10月27日